

Title	調節機能としての親密な他者認知：理想自己と現実自己のディスレパンシーによるネガティブ状態との関連から
Author(s)	上出, 寛子; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2004, 4, p. 113-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3659
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

調節機能としての親密な他者認知

-理想自己と現実自己のディスクレパンシーによるネガティブ状態との関連から-

上出 寛子(大阪大学大学院人間科学研究科)

大坊 郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では理想自己と現実自己のディスクレパンシーによって生じるネガティブ状態を回復する際に、他者認知がどのような影響を及ぼすのかを、親密性との関連から検討した。具体的には、2人1組のペア単位で調査を行い、個人的好悪の判断に基づく個人的親しみやすさの対人認知次元と、社会的評価がなされる社会的望ましさの認知次元を用いて、それぞれについて理想自己と現実自己の評定と、ペアになった相手に対する他者認知を測定し、加えて相手との親密度についても測定した。その結果、社会的望ましさ次元においては、ディスクレパンシーの大きい者は親密な他者を低く評価し、親密でない他者を高く評価することが示され、ディスクレパンシーの小さい者にはそのような傾向は示されなかった。個人的親しみやすさ次元においては、ディスクレパンシーの大きさに関わらず、親密な他者を高く評価することが明らかになった。このことから、一般的な社会的評価を反映する社会的望ましさ次元では、日常的に自己と他者を比較することによって他者認知を調節しているのではないかと考えられるのに対して、個人的な好悪を判断する個人的親しみやすさ次元においては、このような社会的視点を反映せず、親密な他者に対して単に好意を感じているためではないかと考えられる。

キーワード:理想自己、現実自己、自己調節機能、親密性、他者認知

問題

自己のあり方と適応

理想自己と現実自己のディスクレパンシーと適応との関連を扱った実証的研究は Rogers(1951)、Rogers & Dymond(1954)まで遡る。彼らの研究によると、不適応状態に陥っている神経症患者が治療を受けて回復していくにつれて、当初乖離していた理想自己と現実自己の相関がかなり高いものになったことが示され、また、この変容は主として現実自己の肯定的変容によるものとされている。

彼らの研究以降も理想自己と現実自己のあり方については臨床的研究にとどまることなく、広く扱われるようになった(遠藤, 1991)。Biles, Vance, & Mclean(1951)、斎藤(1959)によると、身体、社会性、内的特性などに関する一人称記述 60 項目を用いて、神経症群と正常者群における自己意識を比較検討したところ、神経症群は健常者群に比べ理想自己と現実自己との間により大きなズレがあることが明らかとなった。また、神経症群は、健常者群に比べて現実自己が低く評価されており、逆に理想自己は極めて高く評定されていた。これらの結果から、理想自己と現実自己のズレは神経症的傾向と関連があることは明らかである。

自己調節機能

Higgins(1987)は、人が抱く感情的な悩みや苦しみは理解される自己の側面相互の関係による問題であるとし、セルフ・ディスクレパンシー理論を提唱している。彼は、3

つの自己領域(現実自己、理想自己、義務自己)と2つの自己観点(自己、重要な他者)の組み合わせによって、それらの間のディスクレパンシーと感情の問題を結びつけたモデルを提案した。そのモデルによると、人は現在の状態と自己指針の差異を縮小するように動機づけられており、その中でも、現実自己と理想自己の差異は、理想や願望が達成されておらず、悲しみや、失望、不満足など失意落胆に関連する感情が生じるとされている。

また、Carver & Scheier(1990,1998)によると、自己の望む状態と現実自己の状態の関連については、自己調節機能が有効に機能するとされている。人が目標を遂行するに当たって障害に遭遇すると、内的フィードバックによって再び現在の状況を査定しなおし、もし自己効力感や有望性が一定の閾値を越えていたなら、目標、方略や課題自体を修正した後課題遂行を継続し、予想よりも進歩が小さかった場合には課題から回避するようになるという。

また、Higgins(1996)においても、上述のようなディスクレパンシーの縮小には自己調節機能が重要であり、現実自己と理想自己を含む自己指針が様々な自己調節を反映する結果、自己調節機能が促進された時に人はポジティブな感情を経験し、妨害された時にネガティブな感情を経験するとされている。

以上のように先行研究では、自己にとっての理想と現実に差異が生じた場合には、内的な調節機能によって、その目標や方略を修正したり、課題から回避するという自己調節機能が重要な機能を果たすことが示されてきた。

他者認知の調節と親密性

しかしながら、これまでの研究で明らかになってきたように、理想と現実のディスクレパンシーによって起こるネガティブな心理状態が、常に個人内調節だけで完全に低減されるとは考えにくい。つまり、目標や方略を修正したり、その目標事態をあきらめたりするような自己調節機能だけでは解消しきれない事態が生じる可能性も考えられる。

Tesser(1988)が提唱した自己評価維持モデルによると、人は自己評価を高めたり、維持したいという欲求を持っており、その自己評価には自分に近い他者ほど大きく影響する。このように自分自身に関する評価認知が他者に関する情報によって大きく影響されることを考慮すると、そのような自己調節によってネガティブな状態を解消しきれない場合には他者の存在に調節機能を求めることが考えられる。

例えば、社会的な評価がなされる側面においては日常生活での他者との関係で自己との比較や調節を常に行っていることが考えられる。そのような社会的側面において、自分が理想とは遠く一般的に望ましくない人間であると感じているときには、自分と他者との比較によって強いストレスを感じる。その場合、自分に親しい他者に対してだけでも同様の低い評価を与えることで、自分だけが社会的に低い特性をもつ者ではないと思ひ込み、内面的ストレスの軽減を行うことが考えられる。

このことから、本研究では自己のディスクレパンシーによって生じるネガティブ状態の解消における他者認知の効果を検討する。

また、Higgins(1987)によると、自己調節を必要とするような自己評価をする際には、その評価視点が自分自身にある場合と、自分にとって重要な他者にある場合の二つが挙げられている。また、Tesser(1988)においても、自己評価が低い場合に自己と他者とを比較する際には、その他者が親密な人物であるほど、自己にとって脅威となることが示されている。このことから、理想と現実のディスクレパンシーが大きい場合の自己評価を他者と比較する際には、その他者との親密性が影響することが考えられる。よって、本研究においては、親密性との関連も検討する。

対人認知次元の特徴

他者の認知を調節機能として用いることについては、どのような次元で調節を行うのが問題となってくる。Rosenberg, Nelson, & Vivekananthan (1968)は対人認知次元を(a)social good-bad と(b)intellectual good-bad に分類し、この結果に基づき林(1978)は、男女大学生 70 名を対象に、過去の研究において用いられた尺度項目で好、嫌各 1 名の刺激人物のパーソナリティ特

徴を評定させ、得られた資料について主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。

その結果抽出された上位 3 因子は「個人的親しみやすさ(individual evaluation, IE)」、「社会的望ましさ(social evaluation, SE)」、「活動性」の次元を表すものと解釈され、対人認知構造の基本的次元とされている。また IE は(a)と、SE は(b)とそれぞれ関連が強いことを見出している。

SE は主として他者のもつ知的特性を価値づけて認知する判断であり、他者に対する尊敬—軽蔑などの一般的評価概念を示す次元である。常に他者との比較が伴う社会的な日常生活では重要視される次元であると考えられ、そのような判断次元においては、他者との関係における適応性を考慮した場合に、他者の認知を調節機能として用いる必要があろう。

IE 次元は他者の全体的パーソナリティを好意感情の基準として評価する次元であり、認知者の主観による好悪の判断がなされる特性である。このような、個人的好みや評価される次元においては、社会的評価の影響は少ないため、他者の認知を調節機能として用いるには及ばないと考えられる。

以上のことから SE 次元と IE 次元について、以下の仮説をたて、検証を行う。

仮説

- (1) SE 次元においては、ディスクレパンシーの大きい者は親密な他者を低く評価し、親密でない他者を高く評価する。また、ディスクレパンシーの小さい者については親密な他者を高く評価し、親密でない他者を低く評価する。
- (2) IE 次元においては、認知者が相手の全体的パーソナリティを好悪に基づき判断するため、ディスクレパンシーの大きさに関わらず、親密な他者を高く評価する。

方法

調査対象者および調査実施日・実施場所

関西地区の大学の男女大学生 3 回生以上を対象に質問紙調査を行った。実施日時は 2002 年 6 月、「文化心理学」の授業にて調査を実施した。質問項目に友人について回答する内容が含まれるので、ペアを組んで回答してもらう方法によって実施した。

具体的には、近い席に座っている友人とペアになってもらうように指示し、また友人がその場にいない場合は知らない相手でもよいので同性の他者とペアになってもらい、どうしても相手が見つからない場合はもっとも親しい友人を想定して質問紙に回答するよう求めた。

Table 1 林 (1978)の特性形容詞対の中から調査に使用した項目

対人認知次元	寄与率	項目	因子負荷量
個人的親しみやすさ	37.7%	親しみにくいー親しみやすい	.97
		感じのよいー感じのわるい	-.93
		明るいー暗い	-.92
		ユーモアのあるーユーモアのない	-.90
社会的望ましさ	28.4%	あきつばいーがまん強い	.86
		落ち着いたーせっかちな	-.85
		ふまじめなーまじめな	.83
活動性	20.3%	自信のあるー自信のない	-.94
		消極的なー積極的な	.93

なお、相手との親密度については質問紙に含まれる RCI 尺度により測定するので、ペアを組む相手との親しさの程度を事前に操作することはしなかった。一人で回答を行った被験者は後に分析から除外した。有効回答数は 192 人(男性 56 人、女性 136 人)で、平均年齢は男性 20.74 歳(標準偏差(*SD*)=1.05)、女性 20.52 歳(*SD*=0.81)であった。調査は講義の最後約 20 分の間に実施した。

質問紙の構成

質問紙は表紙を含めて 6 頁あり、タイトルは「友人に対する意識調査-GLiCO 2002-」とした。表紙には、調査実施日時、所属(大学・学部)、学年、性別、生年月、年齢のフェイス項目を設けた。

内容は 1. 実際の自分に対する認知:S→s (9 項目)、2. 理想の自分に対する認知:S→s' (9 項目)、3. RCI と相手に対する好意度と親密度をそれぞれ直接たずねる項目 (12 項目)、4. 友人に対する他者認知:S→o (9 項目)、とした。以上の尺度および項目とともに、EPPS から自律欲求尺度の測定などを行っているが、ここではこれらの尺度については報告しない。

使用した尺度の選定

対人認知の特性形容詞対 実際の自分に対する認知:S→s、理想の自分に対する認知:S→s'、友人に対する他者認知:S→o、友人の自己認知の推測:S→(O→o)を評定するために 林 (1978) によって作成された特性形容詞対を使用した。

林(1978)が用いた項目はそれぞれ、IE 8 項目、SE 8 項目、活動性 4 項目の合計 20 項目であるが、本研究においては被調査者の負担を軽減するため、因子負荷量の高い 9 項目を選出して使用し、各項目において 7 段階で評定するよう求めた。Table 1 に各対人認知元と寄与率、項目、因子負荷量を示す。

RCI (Relationship Closeness Inventory) 相手との親しさの程度を測定するために Berscheid, Snyder, & Omoto(1989)によって作成された RCI 尺度を使用した。

本研究では谷口・大坊(2002)が使用した尺度に一部、修正と追加を行ったものを用いた。

本研究では、友人のイニシャルを尋ねる項目に例示を付け加え、また電話(携帯電話含む)での通話回数と時間を尋ねるのみであった質問に加えて、近年の携帯メール使用の普及増加を考慮しメールでのやりとりの回数を尋ねる項目も追加した。

行動の多様性についての質問では、「インターネットをする」の項目をより具体的にするため「E-mail のやり取り」に変更し、「スポーツ(ビリヤード・ボーリングを含む)をする」については単に「スポーツをする」に変更した。また、「ゲームセンターに行く」「競馬に行く」については除外した。「本・雑誌・漫画を読む」については「本・雑誌を読む」と変更した。「テレビゲームをする」においても、他にも様々なゲームが考えられるので、単に「ゲームをする」とした。同様に「野外活動・アウトドア(キャンプ・ハイキング・ピクニック・つり・登山)」についても、内容の特定化を避けるために「野外活動」と変更した。友人との会話で感じるストレスを尋ねる項目においては「その人との会話でどのくらい疲れますか?」というネガティブなイメージを与えるものであったので、逆転させ、「その人とのどのくらい気楽に話せますか?」という表現に変更した。

最後に相手の友人に対してどの程度好意を抱いているかと、どの程度親しく感じているかについて直接尋ねる質問項目の二つを加え 7 段階評定とした。

結果

RCI 尺度による親密度の測定

RCI については被験者全体における偏りを確認し、分析を行うにあたって正規分布に近づけるために各項目について変数変換を行った後、相手との親密さの度合いを特定する一つの測定値に得点化するため、主成分分析を行い、抽出された主成分の中から第 1 主成分を友人との「親密度」とした。

妥当性の検討 久保(1993)においても指摘されてい

た RCI 尺度の妥当性について検討するため、友人に対してどの程度好意を抱いているか、またどの程度親しく感じているかを直接尋ねた 2 つの項目について、主成分分析の結果得られた第 1 主成分の「親密度」との相関係数を求めた。それぞれ 7 段階で評定された測定値の平均値と、第 1 主成分得点に対し相関分析を行った結果 0.61($p<.01$)であった。比較的高い有意な正の相関があることが示され、本研究においては RCI 尺度により友人との親しさの度合いを測定する尺度として RCI は妥当性があるということが明らかとなった。

ディスクレパンシーと他者認知

対人認知の 3 次元ごとに理想の自己認知得点から現実の自己認知得点を減じ、理想と現実のディスクレパンシーの程度を算出した。これらのディスクレパンシー得点を被験者数に基づきディスクレパンシーの大小 2 群に分類した。

ディスクレパンシーの平均値は SE 次元で 3.72($SD = 3.12$)、IE 次元で 5.81($SD = 3.60$)、活動性次元で 3.75($SD = 2.58$)であった。

また、RCIの主成分分析で抽出された第1主成分の主成分得点を同様に親密度高低 2 群に分類し、その親密度高低 2 群と、理想と現実のディスクレパンシー大小 2 群を独立変数、友人に対する他者認知得点を従属変数として認知の 3 次元ごとに 2 要因の分散分析を行った。結果を Figure 1, 2 に示す。SE 次元においては、親密度の主効果 ($F(1,181)=4.18, p<.05$)、両変数の交互作用 ($F(1,181)=7.16, p<.01$) が有意であり、ディスクレパンシーの主効果 ($F(1,181)=3.88, p<.10$) に有意傾向が見られた。これら両変数の交互作用では、ディスクレパンシーの大きい者は親密な他者を低く評価し、親密でない他者を高く評価しており、ディスクレパンシーの小さい者は親密さの程度でそのような認知の差は見られないことが示された。よって、仮説(1)は支持されたと言える(Figure 1)。

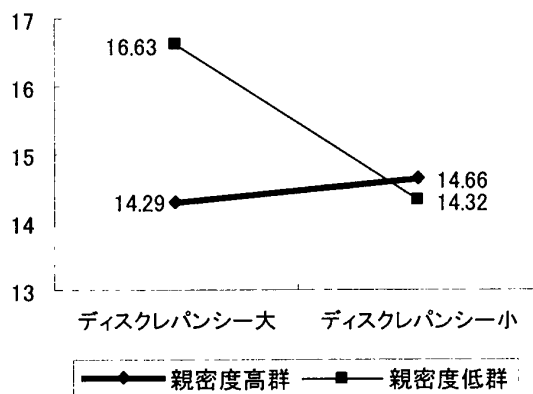


Figure 1 社会的望ましさ

IE 次元において、親密度の主効果 ($F(1,181)= 3.43, p<.10$) に有意傾向が示され、仮説(2)で予測された傾向が確認された。IE 次元では認知者が他者に対して個人的な好悪の判断を行うため、親密な他者ほど好意が増し、高い親しみやすさの評価が与えられやすいことが考えられる。親しく接している他者に対する肯定的な個人的感情が強く影響しているのであろう(Figure 2)。

活動性次元においては有意な結果は得られなかった。活動性次元においては、一般的社会評価とは別の次元であるとともに、個人的好意が関係する次元でもない。よって、SE や IE のように他者との関連が及ぼす影響が小さいことが考えられる。

考察

SE 次元では、ディスクレパンシーの主効果の有意傾向と、親密度の主効果、両変数における交互作用が認められた。理想と現実のディスクレパンシーを大きく感じている者は、親しい他者に対して SE を低く評価し、親しくない他者に対しては高く評価している。

SE 次元は一般的評価概念(まじめな、がまん強い、など)を示す次元であり、様々な他者関係が常に存在する日常生活場面においては、自己の望ましさはどのようなものか、また周囲の他者はどうであるのかを常に意識し、自己にとっての他者の位置づけを調節しようとするのが考えられる。そのような次元において、自分が理想的な望ましさ不足、一般的な社会性に欠けていると感じているときには、自分と他者との比較によって強いストレスを感じる状態になる。その場合、自分の親しい他者に対してでも自己と同様に低い評価を与えることで、自分だけが社会的に低い特性をもつ者ではないと思込み、内面的ストレスの軽減を試みようとするものと考えられる。

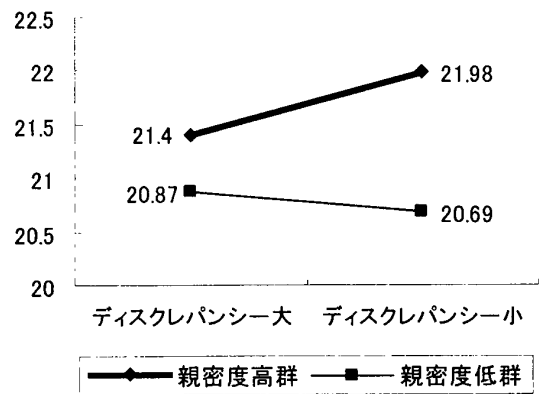


Figure 2 個人的親しみやすさ

しかし、現実自己スコアを理想自己スコアよりも非常に低く評定しているということは、自分が実際に理想とは遠い者であることを認めているということである。その場合に理想的ではない現実自己を無視したり否認するのではなく、自分からは遠い存在である親密ではない他者に対して、一般的な社会的望ましさがあると評価することで自己の至らなさを認めているのであろう。

Tesser(1988)の自己評価維持モデルでは、自己評価を行う際に、評価をする具体的課題が自己にとってどの程度重要であるか、その課題について自分ほどの程度の遂行レベルであるか、そして比較する他者と自分がどの程度親密であるかが自己評価にとって重要であるとされている。自分にとって重要であり自己関連性の高い課題において、優れた親密な他者との比較する場合には、自己評価にとって大きな脅威となることが示唆されているが、このような脅威は常に他者との比較を行う日常生活で行っている社会評価においても関連することが考えられる。

ディスクレパンシーが小さい者については親密度との関連で予想された結果は得られなかった。理想的な自己を日常生活で表出すると他者から自信過多であると疎まれる危険が伴う。その場合に自分と親密な他者には同様の高い評価をし、自己に親密な人間関係の中で自己だけが突出することを回避し、他者関係における適応性を獲得することが予想されていた。しかし、理想と現実と大きな差異を感じていない人は、親密な他者と親密ではない他者とは社会的評価を区別することはしていなかった。現実の自己にとってある程度理想的望ましさを感じている者は、他者との関係においても脅威を感じたりすることはなく自己や他者との関係を余裕をもって認知することができ、個人内調節によって日常的問題を解消することが可能であるため、他者認知調節にその解決法を求めらるには及ばないことが考えられる。

理想と現実の差異を問題とした研究では Morreti & Higgins(1990)が、現実自己をポジティブな理想的特性で記述しても自尊感情の高さは必ずしも結びつかず、個性化された基準としての理想自己に照らした現実自己の位置づけが自己評価に関連していることを見出している。本研究では自尊感情を扱ってはいないが、自尊感情とは自己に対する全体としてのポジティブな評価感情であり、ポジティブな自己認知と結びついている(遠藤, 1992)ことが指摘されていることなどを考慮すると、この要因との関連が予想される。また遠藤(1992)によると、個人にとって重要な概念についての理想と現実の差異スコアと自尊感情得点の間に強い相関関係が見出されたのに対して、重要でない項目では相関関係がほとんどないこ

とが明らかとなっている。つまり、個人にとって重要な側面における理想と現実の差異が全体的自己評価に強く影響することが指摘されている。

本研究では一律に理想から現実を減じる方法をとっており、個人要因の役割を十分に考慮していない点が今後の課題として挙げられよう。本研究での結果は対人認知における全体的傾向を問題としたものであるが、個人が各認知次元をどの程度重要視しているかを詳細に検討する必要がある。

また、そのような他者との社会的比較における自己を問題とした研究においては、他者との比較において自己を評定する場合のほうが、自己を独立に評定する場合よりも、自尊感情と自己認知との結びつきが強いことが示されている(外山, 2001)。つまり、他者との比較における自己認知がポジティブなほど、自尊感情も高くなるということである。自己の経験は個人内の閉じたシステムで進行するのではなく、他者との関係性や相互作用がその人の自己理解を方向付けるのに極めて重要であり(遠藤, 1999)、特に日本においては自己と他者を比較する社会的比較が重要であり、その比較した結果が自己にとって大きな意味を持つことが指摘されている(高田, 1992)。以上のことを踏まえると、質問紙での調査方法においても、他者認知、自己認知を独立に問うのではなく、他者と比較した自己認知を明らかにするという工夫も今後の研究において必要と思われる。

最後に、対人認知次元には様々な次元があり、本研究においては自己や他者に対するおおまかな全体的認知を扱った。本研究で示唆された結果をもとに、大学生が自己や他者を認知し比較する次元を、個人の重要度や他者との比較を含めた観点から詳しく検討することが必要であらう。

引用文献

- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Billes, R. E., Vance, E. L. & Mclean, O. 1951 An index of adjustment and values. *Journal of Counseling Psychology*, 15, 257-261.
- Carver, C.S. & Scheier, M.F. 1990 Origins and functions of positive and negative affect: A control-process view. *Psychological Review*, 97, 19-35.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1998 Discrepancy-Reducing Feedback Processes in Behavior. (Carver, C. S., & Scheier, M. F. *On the self-regulation of behavior*. New York: Cambridge University Press. Chapter 3 Pp29-47.)
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向—自己概念と適応との関連で— 上越教育大学研究紀要, 10,

- 19-35.
遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 150-167.
林文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察, 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-140.
Higgins, E. T. 1996 The "self-digest": self-knowledge serving self-regulatory functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 1062-1083.
久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ—RCIの妥当性と限界— 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
Moretti, M. M. & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
Rogers, C. 1951 *Client-centered therapy*. Boston: Houghton, Sage. 『遊戯療法; 集団療法』友田不二男 (編訳) 岩崎書店 1956)
Rogers, C. & Dymond, K. F. 1954 *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago Press. 『人格転換の心理』友田不二男 (編訳) 岩崎書店 1957)
Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. 1968 A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.
斉藤久美子 1959 自己意識の分析による人格的適応性の一研究 心理学研究, 30, 277-285.
高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
谷口淳一・大坊郁夫 2002 同性友人関係におけるパーソナリティの類似性認知が魅力判断に与える効果—パーソナリティ特性次元と対人魅力次元による検討— 対人社会心理学研究, 2, 51-64.
Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 181-227.
西山美樹 2001 自己認知と自尊感情ならびに自己意識との関係 筑波大学心理学研究, 23, 161-167.

Perception in close relationship as a regulation function: discrepancy between ideal self and actual self

Hiroko KAMIDE (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This research investigated how closeness with a friend and discrepancy between ideal self and actual self affected perception to others. They rated "individual evaluation" and "social desirability" about ideal self, actual self, and their friend. Closeness with a friend was measured, too. The main results were as follows: on "social desirability" individuals with large discrepancy tended to evaluate a close friend low, and a less close friend high. On "individual evaluation" individuals tended to evaluate a close friend high and a less close friend low regardless of discrepancy size. The results indicated that "social desirability" was a dimension of general evaluation, so they regulated perception to others according to closeness and discrepancy in comparing self with others daily. And "individual evaluation" did not reflect sociality but judgment of individual likability, so they evaluated their friend high according to their closeness.

Keywords: ideal self, actual self, self-regulation, closeness, perception to others